

しないが、ソ連で行われた核爆発実験によるものについてはある程度の事はいわれそうである。

ソ連爆発ではこの影響と思われる可成り大きな放射能が検出され実験後5~7日位の降雨によって見られる。またこの放射能観測時の気圧配置は実験後蒙古乃至アムール川上流附近より満洲を経て日本海又は沿海洲に進出した前線を伴った低気圧の接近前面によって見る降雨で

あり、上層では実験後降雨現象のある1~2日前は5km位下層では西又は北西風がある事等が上げられる。また稚内で記録される微気圧振動の大小はその後の放射能値の多少にはあまり関係がなく、実験後可成り大きな放射能検出が5~7日と12~14日位の2回位観測される事が多い。簡単な資料であるが稚内での放射能観測の調査とした。
1957年1月25日。

<書評>

日本の季節 (動物編) 大後美保 著
実業之日本社 1958年3月刊 220頁
220円

气象台、測候所では普通のいわゆる気象観測の外に、動植物季節の観測も行っている。

著者によると、それは日本では明治13年頃からとのことである。動植物季節の観測は、著者も述べておられるように、その年、その地方の総合的な気候状態を知る上に大いに役立つ。18世紀末フランスの医学アカデミーが組織的な気象観測をし、その整理をルイ・コットが行っているが、その際にも動植物季節と一緒に考察していた。だが、気象観測が気候学的よりもむしろ気象学的立場に重点を置いて検討されるようになってからは、忘れ去られたようになっていく。長年にわたって日本全国から集められた観測資料から、この本に見られるような季節の変化図が作られるのは大変なことだったろうと思われる。

内容は、われわれ日本人に日常親しみ深い鳥類、昆虫類など42種にわたり初鳴き、出現、去来などの季節を、ある時は著者の幼時をしのび、ある時は著者の家庭を背景として、和歌、俳句、童謡あるいは民話などを引用しながら、わかりやすく説いている。啓蒙書というよりは、動物、いな、自然に対する著者の愛著がすみずみまで感じられる科学随筆とでもいうべきであろう。動物季節の観測の仕方がまず説いてあるのも行届いている。

ただ、余分な注文かも知れないが、初鳴き等の日付けは平均値そのものしか図示していないが、平均値に標準偏差あるいは変動度のような変動の幅を入れてあれば、実益上にはもっとプラスになったのではないだろうか。

この本の外、「日本の季節」シリーズとして、植物、生活、農事、気象の4編が計画されているそうであるが、大いに期待したい。(奥田)

1958年4月

<書評>

「氷と雪」 学級図書館4年
野口敏正 著
青葉書房 1958年1月刊

「雲のはなし」 学級図書館4年 20.
平塚和夫 著
青葉書房 1958年2月刊
各99頁 定価80円

小学生から高校生相手の啓蒙書は沢山出ているが、なかなか良書は少いといわれる。その中でも小学生向きの本はむずかしいとされている。例えば、何々博士著とかいう本は名前は立派でも、本当に子供を知らないで書いた本は、自分よがりな本が出来上っている。この2人の著者は気象庁の天気相談所に勤務しており、子供たちの、あるいは子供たちの母親、先生などの質問攻めにあって、子供たちの不思議、理解力などをよく知っている方々である。無名ではあってもこれらの人々に執筆を依頼した出版社にまず敬意を表したい。

野口氏の「氷と雪」は、親子の問答をとところどころ入れ、たこあげから説き起して北風→日本海側の降雪→冬の天気……と、子供が読みやすいように気を配っている。雪の性質、雪の与える害と利益など、日常生活に即した◎で述べている。表題は「氷と雪」になっているが、雪に以上の頁数を使い、雪が前編となっているところからみると、「氷と雪」と題した方が良かった。単に小学生向きだけでなく一般の啓蒙書としても参考となる本である。

平塚氏の「雪のはなし」は、観天望気から説きおこして、雪粒の大きさ→雲のできるわけ……と、子供にはむずかしくて、無味乾燥になりがちなることを、昔話や身近の現象によってゆとりを持たせ、楽しませる内容になっている。最後の章に「雲と芸術」が設けられているのに感心させられた。平塚氏の文章には4年生にはむずかしいと思われる文語が散見されるのが気になる。(奥田)